

DRAMA かながわ 69

神奈川県演劇連盟事務局・横浜市中区福富町西通り52(横浜演劇研究所内) Tel.045-261-4866

僕らの船の旅はこれからも続いていく

「青少年のための芝居塾」公演 光る航跡

脚本:熊手竜久馬 潤色・構成・演出:笹浦暢大●音楽監督:金子貢 振付:高島正典

2013年 8月17日・18日 神奈川県立青少年センターホール



光る航跡を観劇して

ヨコスカ・ベアフットシアター 三浦正行

神奈川県演劇連盟の加盟劇団にいる笹浦暢大という若手演出家がいる。僕は彼の舞台をいつも楽しみに劇場へ観劇に出かける。そして客席に座ると斜めに観る。それは、彼の芝居は斜めで観ると面白いのである。しかし、今公演はまっすぐに観ることした。

芝居塾…つまり夏休みに芝居を勉強する為に来た若い塾生による公演だからである。

中、高校生以上であれば誰でも芝居塾に参加できる。オーディションで配役が決まる公演とは違う。その意味では…つまり配役を横並びで演出をする笹浦暢大氏の努力とやさしさを感じた舞台であった。それは総勢120名のキャスト&スタッフを舞台に立たせなければならない。当然、ダブルキャストではあるが、それでも舞台上は50名である。バレエやオペラでもそんな人数はいない。まずはその怒涛の演出に敬意を表する。

いや、僕なら体調を理由に逃亡する…

さて、私の好きな彼の演出の舞台なので少し辛口にも書いてもいいだろう。公演はミュージカル形式で歌あり、ダンスあり、と若いキャストが舞台を駆け回っていた。舞台のセンターには大きな船があり、横浜開国記念クルーズ?で乗船したらその船が難破して、そのまま大海原を航海して無人島に漂着して、サバイバルな環境で子供達のコミュニケーションや団結力などの必要性を説いていくストーリーであろう。私が子供の頃に読んだ「十五少年漂流記」がベースと思われる。大ホールの公演では、いわゆるプロセニウム・アーチにどんな絵を描き、それを照明等で変化させ臨場感を盛り上げる。ホール公演の重要なファクターである。今公演はセンターに大きな船を置き、それを変形させ、回り舞台で場面展開をしていく手法だが、神奈川県演劇連盟の期待の若手演出家としてはオーソドックスであった。予算が少ない地方公演の劇団四季ミュージカルのようなものである。そう書くと、良くないと思われるが…そうではない。ミュージカル公演の演出は合格点である。

しかし、予算がないミュージカル公演を奇才なアイデアで演出していたのが、70年代の東京キッドブラザースの故東由多加氏である…オーソックスな舞台セットではなく、個性ある舞台セットが観たかった。

私は舞台の創造性は予算がないプロジェクトで発展すると思っています。

中途半端な舞台美術や照明は演出の邪魔になることがある。どこかの劇団が懐中電灯を明かりにしていた…それではいいのでは。また、バリライト?のような照明も人工的に見えて、大海原や無人島のイメージに合わなかった。子供達にも、哲学的に有形物、無形物を問わず代用すると言う創造性は重要である。また、子供達は大ホールでのセリフ

回しが出来ない…つまりきちんと発声と滑舌できてない。その時は、ストーリーの進行役を入れるのは常套手段である。しかし、その進行役はテレビレポーターで、舞台でのインサートが弱く主舞台との差別化がなく、ぼやけてしまったのは残念である。現代演劇は小劇場が主流で、セリフの発声や滑舌は悪くても演劇になる。また、多くの役者やスタッフは大ホール公演の経験が少なく、そこを今後どのように芝居塾で学ばせるかが課題であるのではないかと…。それと同時に芝居塾への応募が多いのはすばらしいが、制作サイドとして舞台にのせる人数と演出の共有性を再検討した方がよいのではないかと…

青少年のための芝居塾を終えて

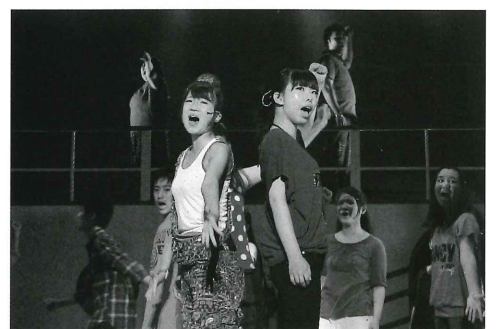
ミュージカルプロジェクト in 神奈川「M.PinK」代表 笹浦暢大

2013年の青少年のための芝居塾は出演者小学校2年～60代まで98人、関係したスタッフ合わせて130人、場当たりまでの総稽古時間230時間、1,562名動員という今までにない規模で無事終了することができました。これもひとえに神奈川県立青少年センターの皆様、神奈川県演劇連盟の皆様、出演者スタッフ、そして出演者の家族。そして何よりも、観に来てくださったお客様のおかげで成り立っております。本当にありがとうございました。

さて、この企画、ふたを開けると、1年ほど前から始動しはじめました。我々が担当すると神奈川県演劇連盟理事会で決定をして、青少年センター舞台企画課担当と、打ち合わせ。神奈川県演劇連盟員による実行委員会との打ち合わせで、「マグカル」という企画にふさわしくて、なおかつ団体のカラーに即した作品に仕上げていくための前段階

の会議で多くの決定をしていきます。具的にこういう作品が好ましいという提示も正直あります。我々が話して決めていったのは、この企画を「青少年感動体験及び演劇教育事業であるとまず位置づけました。「青少年の成長できる青少年事業であるべき、神奈川にまつわることを入れる、極端な主役を作らない、稽古や本番を通じて参加者が登場人物と一緒に成長できるような作品、そのための正しい指導、劇的空間を圧倒するための圧倒的なスタッフ」必要な点が決まっていきました。我々M.PinKは劇団制をとっていませんので、打ち合わせ担当チームと青少年センター側と一緒に決めていきました。

我々はミュージカル集団なので、芝居塾担当を立候補する前段階からミュージカルにしようということだけはきちんと決まっていました。しかし、神奈川県はミュージカルが



盛んですが、神奈川県演劇連盟や青少年センターがミュージカルが盛んなわけではありません。

いわゆる歌入り芝居とミュージカルの差がわかる人などほとんどいないといったところが現状です。ミュージカルらしいミュージカルにしよう。シーン進行が楽曲によってなるべくしていく。状況があった→歌という歌入り芝居である歌の起用を極力避けるなど、なるべく多くの人に関われてなお且つ、ストレートプレイとの差を出す。

ストーリーは一人の人間が成長していくのではなく、その人と関わっている大勢が一步先に踏み出せるような話にしよう。企画が決まると作品の枠組みも固まってきました。学校演劇や市民参加型ミュージカルなどが面白くなってしまいう理由にセリフ量の平等性や登場シーンの平等性というものがありますが、青少年感動体験事業と位置付けたのでこの点は、作品としては早々と捨てて、代わりに大人数ならではのダイナミックさというものを展開していくようにしました。参加者の大人数募集をすることは最初から決めていたので実際に大勢来てくれるかわかりませんでした。が、きちんとオーディション参加者が集まったことは素晴らしいと思っています。100名を超えるワークショップオーディションを経て、稽古へと移りました。約100人全員に舞台に立ってもらうことにしたため、稽古場を増やすことにしました。舞台企画課担当の方々には本当にたくさん確保してもらいました。やっとスタートです。でも始まってしまえば、一応職業としている得意なフィールドなので、問題ないだろうと思っていました。が、まだまだありますね。

歌、ダンスの経験者がほとんどいないので、エチュードやシアターゲーム（演劇的思考や能力を高めるための演劇的要素のあるゲーム）は反応がいいのですが、振付や歌は、なかなかの無反応です。全部「演技」であるのですが、やはり厳しい。募集の段階で演劇部だけに案内が多くいった裏目が出てしまいました。「自分（役）の気持ちの延長された先が歌やふり（動き）につながる」「すべてがセリフである」ということが、かえって今までの演劇経験が邪魔をして理解が遅い。拒絶反応があるといったことが多くありました。

まあ、それでも教える側は全員職業演劇人ですので、やれない人間は来ていないわけで、それはクリアできる課題でした。もっと大きかったのは、衣装と大道具の製作、そして宣伝、制作面です。一番の責任は準備不足及び人手不足があったうちの団体にあるのでしょうか、なかなか多くの問題をはらんでいまして、「今年度から芝居塾が青少年センター主催事業になった」という認識が青少年センター担当者によってまばらである事実は間違いがなく、「やらせてやっている」感に非常に苦しんだことは事実です。制作場所のやりくり、不確定段階での図面請求や口出しな



どは、主催なのか貸小屋なのかのスタンスのあいまいさがない。担当者同士がうまくいかないなどで、大道具は最後まで苦しみ、また、きちんと指導できていたかはわかりません。しかし、芝居塾出身者でいま大道具に進みたい子がこの事業を通じて現れているので、成果はあったのかもしれない。衣装はもっと悲惨で、こちらはそこまで専門知識がない人間が中心となったということもあってか、参加者、保護者含めて多大な迷惑をかけ、そしてぎりぎりの仕上がりになるというこれまた指導者側としてはあるまじき事態に陥ってしまい、大変情けない思いをしました。

制作面も非常に反省は多く、市民参加型ミュージカルで日常的に行われているやり方を県演連の制作を協力してくれた方々にきちんと引き継いでおらず、かぼちゃ、壺座、麦の会の三名とマグカル担当の井上さんたちの協力で何とかなりたちましたし、宣伝でも、マグカル劇場の目玉企画だと聞いていたのに本家マグカルのHPでは一向に情報が載らないなど、失敗や問題点を挙げるときりがなくいろいろなありました。

しかし、それでも、我々が担当したこの企画はどうだったのか？と言われれば、胸を張って「成功でした」と言えると思います。少なくとも出演した約100人。関わった人たちが楽しく、やりがいを持って取り組めたりできて、基礎やメソッドなど、きちんとした正しい知識を持ち帰れる。一生付き合うかもしれない多くの友人（それも広い年代）を手に入れられる。それが目にも見えてきちんと形になる。なおかつ、観に来てくれる多くのお客様が共感する、涙する。

その成果がきちんと目に見えて存在していれば、一応の成功を収めていたのではないかと考えています。我々の団体も芝居塾という企画も色々課題があることをまじまじと痛感しました。しかし、我々の芝居塾は「マグカル劇場」の柱となって初めての試みでした。この先、どんどん進化した芝居塾になっていくことでしょう。その礎が少しでも築けたなら幸いです。

素晴らしい企画を担当させてもらえて本当に感謝しています。ありがとうございました。

芝居塾を考える

池上 裕（神奈川県立青少年センター舞台企画課長）

千秋楽の幕が下り、カーテンコール、客出しとなったあと、芝居塾の感想を聞かれれば、正直に言って、作品の評価より、「よくぞ、事故もなく無事に終わってくれた。」という気持ちが一番近いかもしれない。

4月末のオーディションからおよそ4ヶ月。小学生から大人まで、約100人の出演者が、紅葉坂に登り一所懸命稽古に取り組んできた。この夏の記録的な暑さの中、体調を崩す子も多く、辞めたいという子の相談を受けたこともあり、そして本番前の超緊張状態や、ほかにも運営上の課題もあった。舞台装置もこれまでになく大掛かりで上手く動くのだろうかと心配したこともあり、それらを思い出すと、子どもたちみんながカーテンコールで手を振り、歌い、踊る場面を見て、「よくがんばったなあ」と涙も出てくるのである。

この芝居塾は、当初（2007年）の青少年センター主催の「高校生のための芝居塾」からはじまり、神奈川県演劇連盟主催、青少年センター共催による「青少年のための芝居塾」となったが、一貫して多目的プラザで実施されてきた。昨年、青少年センター開館50周年の記念年であること、また子どもたちが大きな舞台に立って芝居をするという稀有な経験をすることで彼らの成長につながるという考えから、ホール公演としたものであるが、その成果が黒岩知事をはじめとした多くの人から評価されたことにより、芝居塾は県の推進するマグカル事業の大きな柱の一つとなったのである。

青少年センターがマグカルに取り組むきっかけは、県の



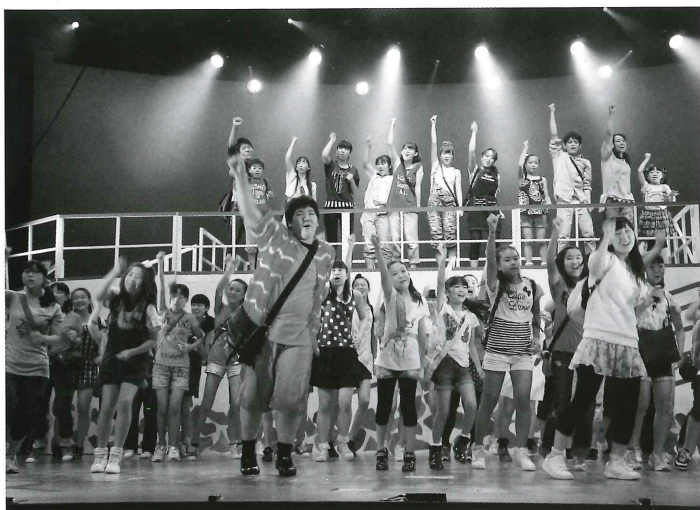
施設見直しでセンターの存在意義が問われるなか、改めて若者たちの舞台芸術振興に果たす役割が認められ、舞台芸術を中心とした若者文化の殿堂として位置づけられたところから始まる。文化芸術の持つマグネット力で神奈川を盛り上げようというマグカル事業の中核施設として、マグカルシアター、マグカルフライデー、マグカルハイスクール演劇フェスタ、そして、マグカル「青少年のための芝居塾」を実施することになったのだ。

こうした経緯もあり、今回の芝居塾「光る航跡」では、神奈川らしい企画が求められ、検討段階から、神奈川にゆかりのあるものが入れられないかなどの課題が与えられた。烏帽子岩や大涌谷が（無理やり？）出てきたのはそういう理由による。

「光る航跡」は、これまでの芝居塾とは進め方、あり方が異なっていた。担当団体が、一つの劇団ではなく、専門家の集まり・プロジェクトであったこと、小・中学生やダンスチームが参加したこと、舞台装置がこれまでになく大掛かりで、舞台転換も多かったなどである。

大勢の子どもたちが舞台に立つ機会をつくり、また、参加した塾生の公演終了後の表情を見れば、「光る航跡」にかなりの高評価ができるのは間違いない。

そういった中で、これまでの芝居塾を知っている人からは、以前は、塾生を育てながら、塾生とともに芝居を作り、担当の劇団も成長していくという手作りの良さ的なものがあったという声も聞く。確かにこうしたことの大切さも見逃せない事業だと思う。芝居塾は、他のホールとは違う青少年センターならではのものにしたいという気持ちは大きいですが、神奈川の演劇人は多種多才で、また新たな芝居塾を見せてくれる人たちもいるに違いない。こうした期待とともに、芝居塾はどうあるべきかという悩みは尽きない。



「第11回神奈川演劇博覧会」開催!!

神奈川県演劇連盟（以下“県演連”）が主催する演劇の祭典で通称「演博」が今年も開催されます。「入場無料！出入り自由！！」で演劇を身近にすることを目的に県演連が開催してきて今年で第11回目となりました。最初は相鉄本多劇場で始まり、舞台を神奈川県立青少年センターに移し、県演連が企画する事業の年度末の恒例のイベントとなってきました。2011年には震災が日本を襲い3月11日から8日後に開催を控えていた第8回神奈川演劇博覧会は中止を余儀なくされました。より良くするため、芝居を気軽に見ていただくため、様々な変化を繰り返し、演劇博覧会も成長してきました。節目の第10回目を去年迎え、そしてまた、今年第11回目に繋がり開催されることがとても嬉しく、そして誇らしくもあります。11年目を迎える演劇博覧会に是非ご期待ください。

今年の演劇博覧会は少し日程が変わります。例年では3日間の開催としていましたが、今年は暦の都合で2日間となりました。しかし、日程は短くとも演博の行うことは何も変わりません。神奈川を拠点に活動する劇団が50分の芝居を上演致します。今年の参加団体は9団体。ストレートプレイ・即興・一人芝居など様々な劇団に集まっていただきました。どこから観てもいつまでも観ても全部観ても、もちろん無料です！新しい劇団との出会いの場に是非是非お足を運んでください。

第11回神奈川演劇博覧会

日程：2014年3月15日（土）・16日（日）

会場：神奈川県立青少年センター・多目的プラザ

入場無料

■ スケジュール

15日（土）

- | | |
|-------------|--------------|
| 11:00/16:00 | チリアクターズ |
| 12:00/17:00 | 空飛ぶペンギンカンパニー |
| 13:00/18:00 | 劇団かに座 |
| 14:00/19:00 | 虹の素 |
| 15:00/20:00 | ライトラップ |

16日（日）

- | | |
|-------------|---------------------------|
| 11:00/15:00 | 劇団きさく座 |
| 12:00/16:00 | 湘南テアトロ☆デラルテ |
| 13:00/17:00 | Yokohama Shakespear Group |
| 14:00/18:00 | PAP |

第11回
神奈川
演劇博覧会

あなたの観たい芝居がある。
あなたの観たことない芝居がある。

入場無料・全席自由

2014年3月15日(土)/16日(日)
会場:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ
主催:神奈川県演劇連盟 神奈川演劇博覧会実行委員会
マグカルフェスティバル実行委員会
共催:神奈川県立青少年センター
問合せ:神奈川県演劇連盟 080-5659-2757
E-MAIL: info@kenenren.org
URL: http://kenenren.org

文化・芸術はもっと身近になる

文：浅水真子

2013年度から始まった新たな事業「マグカルフェスティバル」について、神奈川県立青少年センター舞台企画課池上課長と事務局担当の井上学さんにお話を聞いてみました。

「マグカル」とは、「マグネットカルチャー」の略称です。文化・芸術が持つ、人を引き付ける力という意味が込められています。マグカルフェスティバルは、青少年のための芝居塾がきっかけで、黒岩神奈川県知事の若い人たちを応援したいという思いから始まりました。ブロードウェイのようにいつでも芸術に触れられるようにしたいという構想から始まっています。演劇などのパフォーマンスをしたい青少年の人材の発掘や育成を目的としています。

マグカルフェスティバルの企画の中には、K A A T (神奈川県立芸術劇場) が担当する公演とバーチャルマグカルというポータルサイト運営、青少年センターで担当している

マグカル劇場があり、その中に、マグカル劇場青少年のための芝居塾、マグカルハイスクール演劇フェスタ、マグカルシアター、マグカルフライデーの4つがあります。

今回は青少年センターで行っているマグカルシアターとマグカルフライデーについてお話を伺いました。マグカルシアターは原則として演劇の上演を中心に一週間程、マグカルフライデーは演劇以外にも音楽やダンスなどの公演を中心に金曜日のみ、無料で多目的プラザを使用できるというものです。青少年、または青少年向けに活動している方が対象です。

このうち、井上学さんが担当されているのは、マグカルシアターとマグカルフライデーの事務局の仕事で、打合せの予定調整、問い合わせ対応、広報、チケット受付などです。「今年度は舞台企画課と神奈川県演劇

連盟横田理事長とともに連携をとりながら手探りの状態でしたが、1年間の活動の中でだんだん意思疎通がとれ、方向性が見えてきた」ところだそうです。また、1月には『出張マグカル』ということで、青少年センター内のレストラン『メルヘン』で公演を行うという試みもあります。「青少年センターが核ではありますが、県の施設や劇場以外の場所を使うなど新しい発想での企画の持ち込みも歓迎します。」と池上課長。そして、マグカルフライデーに関しては、金曜日のみで舞台になれていない方の利用に備えて、今後技術面での支援を増やしていくことも視野に入れているそうです。



現在は主に神奈川県のウェブサイトで募集をかけていますが、文化施設やマスコミにも募集をかけるとともに、Facebookなどを通じての呼びかけも積極的に行っています。こうした新しいツールを使用し

ての呼びかけは、目にとまりやすく効果的に思えます。新しい事業だからこそ、枠にとらわれない発想でどんどん挑戦していける良い機会です。今後も若者たちが継続して活動していけるようなサポート体制を充実させ、神奈川県全体の演劇をはじめとした文化的活動が活発になっていくことを期待します。

募集サイト

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/p678184.html>

マグカル劇場 facebook

<https://www.facebook.com/magcultheater>

僕らの演劇

劇団かに座

「もやしの唄」 作:小川未玲 演出:馬場 秀彦

6月14日・15日・16日 於:かなつくホール

劇 団かに座の第106回公演を観劇してきました。

タイトルは「もやしの唄」タイトルが示す通り、もやしの栽培を営みとする店主恵五郎を取り巻く家族と隣人のお話。



舞台セットは劇団員の手作りとは思えないくらい立派で素敵でした。ラストの転換も暗転が明けると映像のスクリーンから工事の幕へと変わり感心しました。衣装についてもきちんと時間(日付)の変化に対応して何度も衣装替えされていましたね。舞台は高度成長期の昭和40年頃。今では工場の機械で栽培しているもやしを、人の手作業によって栽培されていた時代。

もやしの唄というのは夜中に成長するもやしの音で、それを感じ取れる聞き取れる人間はいい人だそうです。家族・隣人…高度成長期に色々なものが変わってしまい、時代の移り変わりには勝てなかったのか、結局は店を閉めてしまった恵五郎だったけれど恵五郎のもやしを愛する気持ちは変わらずにいてくれました。

時代は移り変わり、人の死別を通して人々は成長していく。昔はいい時代だったと懐古するべきか…。今はいい時代だと思いを馳せれば良いのか…。観ている側に問う、温かい良い舞台でした。

演劇プロデュース『螺旋階段』 田代真佐美

ヨコスカ・ベアフットシアター

「上海奇兵隊」

企画・構成・演出:大輪茂男 脚本:宇野正玖(劇団「海賊ハイジャック」)

6月21日・22日・23日 於:神奈川県立青少年センター多目的プラザ

エ ネルギーが溢れていたー!

出演者のほとんどが若者たち。しかも、役柄が血気盛んな役どころばかり。皆が皆、主役と言わんばかりに、弾けて押し出して来る。超熱演の熱い舞台だった。羨ましい位のパワーに圧倒された。いいねえ、若いって。

しかし、私には少し食傷気味。ずっとテンション高く2時間余り。少し疲れました。多目的ホールではエネルギーが収まりきれなかったのかな。もっと広い空間だとよかったのかもしれない。

多目的ホール独特の空間の使い方もよいと思う。

最近、色々な劇団が色々な使い方をしている、おもしろい。まだまだ面白い使い方をするとところが出てきそうで多目的ホールの公演はそんな楽しみ方もあるみたいです。でも、正面切った芝居が柱に向かっているのは、ちょっともったいないかな。あれって客からは役者の横顔しか見えないですね。舞台奥の芝居ならいいんだけど、柱近くで芝居は何か不思議な気がしました。



テンション高く、早口の声をはったセリフ。スピーカー近くの座ったところが悪いのか、セリフがよく聞き取れない時があった。セリフが入る時はもう少しボリュームを落としてもよかったように思う。もしかしたら、最初はよかったのかもしれないけど、千秋楽だったから役者の声が枯れてしまったのかな。あれだけ声をはっていても、声も枯れるかな。

聞き取りにくい分、あるいは私の頭が悪いのか、話の筋を理解しにくかった。いくつかのチームがあるのだが、誰がどれでどう関わっているのか、わかりにくかった。話の中で敵味方入り乱れるが、この人はどういう人だっけ?と頭の中で話が中断。私にはどのチームも似たように見えてしまい、そのチームが何の役割をはたしているのかが、わかりずらかった。各チームの特徴が近かったのもう少しそれぞれを誇張して色分けされていたらわかりやすかったかもしれない。

この話はどこへ行くのか?どこに落ち着きたいのか?と考えてしまった。公演後、三部作のうちの一つと言っていたから、全部観れば理解できるのかもしれない。

劇団かに座 高島明子

劇団麦の会

「エキスポ」 作:中島淳彦 脚本:山口雄大

6月22日・23日 於:相鉄本多劇場

1 970年初夏、大阪万博で日本中が湧く頃。宮崎の田舎町で、昼は食堂 夜は連れ込み旅館を切り盛りし、一家を支える母がテレビを見ながら急死した。最後の言葉は「父ちゃん、人類の進歩と調和げな」だった。喪主の父は気が抜けたよう、長男も頼りにならない。仕方なく葬式は嫁と出戻りの長女が仕切るようになった。話は通夜から葬儀と一昼夜の話だが、次々と現れる弔問客に母の交友関係の広さや、人柄が伝わってくる。挙句には長男の浮気相手の亭主が現れ、お母さんが毎月払っていた感謝料



1万5千円を要求（最後の回らしい）。知らなかった…でも誰にも聞けない。母の日記が唯一の頼りだ。

日記を探しに旅館に行くが部屋が荒らされている。でも盗られた形跡はない。なぜ？

そして、旅行代理店の女が現れ、母が申し込んだ万博ツアーの話をする。費用の21万円うち1万円は手付でもらっていると。「今ならキャンセルもできますが…？」これに対し、甲斐性なしの父が「母ちゃんが最後に決めた事だから万博に行く。」ときっぱり！でも支払いの当てはない。どうする？他にもトイレに通う見知らぬ客（実は香典狙いだった）。二人の若い男性客。葬儀社の人々。そこへ、長女の元旦那がレコード会社の人と登場、葬儀だというのに赤いネクタイで。作曲家志望だ。聞けば、長女が口ずさむ歌を曲にしたら、その曲が採用になった。ついては自分にその曲をくれないだろうか？とビジネスの話だった。

「自分で作れば…」と断るがあきらめきれない様子。狭い舞台によくぞ次から次へと16人もの人たちが出入りできるものだと感心した。

前半はゆったり話す日向弁で間延びしてしまい、何を伝えたいのかがよく分からなかったが、後半は集大成で面白く集中できた。ダメな男たちの頼りなさが際立った、万博の費用を払う為香典に手を付けた父。浮気の慰謝料を払う為香典をくすねた長男は、母の日記をほとんど読むことなく、焼き場で焼き安心している情けなさ。（この日記については、皆が（客も）興味を持っているはずなのに、踏み込んだ内容がほとんどなく、もう少しオチが欲しいと思った。）これに対して女たちはカッコ良かった。元旦那に自分からは許可できないと同級生に曲を預けるくんだりや、父の香典の件をやや乱暴な手段であるが機転で解決した嫁の気風のよさは心地よく、男を立てる九州女のプライドを見せつけられた。

ちょっと考えてみた。「人類の進歩と調和」は万博のテーマだったが、43年経った今、私たちは「人類」として進歩しているのだろうか？悲しいことに家族間の「調和」さえなくなりつつある。昭和の頃と比べ、人間として「進歩」や「調和」という事をどこかに置き忘れてしまったように思えてならない。単なるノスタルジーかもしれないが…

劇団横綱チュチュ 鈴木みな

劇団河童座

「ピノッキオの冒険」

作カルロ・コッローディ / 脚色・演出 横田和弘

7月27日・28日 於:相鉄本多劇場

7月27日の客席は9割がた子供達であった。子供達にとっては充分楽しめた舞台だったのではないかな。ただ大人の観賞に耐えられたかという点で感想を述べて見たい。

この舞台はシュールとリアルが混在した世界が展開するわけであるが、幕あけからラストまで同じリズム。同じムード。たとえば全員で唄う場面なんかはガラッと変化するとか、唄が舞台の中だけで客席まで届いていないのではないかな。それ以外に、父親が丸太を割ろうとして丸太に話しかけられる。初めは仕方なしに木彫りに取りかかる。そこから次第にピノッキオに対する愛情が芽生え始める。そして人間になったピノッキオが父親を思う気持ちを知って親子相和するわけだが、そのプロセスが父親役にデッサンされていない。初めから終わりまで同じ感じでピノッキオに接している点がどうも。また、全体がハッピーに収まっていて違和感がある。原作はもっと残酷で差別的で世界中から避難を受けたと思う。現実の我々を取り巻く世界も負けず劣らずの過酷な世界だ。ファンタジーであるにして、観客の子供にも生ぬるい倫理観ではなくリアルな現実、生きることのシビアさを描いてもよかったのではないかな？

最後に、ピノッキオが操り人形の時と人間になった時の違いをもっと鮮明にする。例えば操り人形の時は上から糸で吊された人形なんだから、ピノッキオにそれなりの意志はあっても糸を操る人物の思うがままにさせられる、ピノッキオの自覚の動きを制御する、糸の操りに対する葛藤とか、糸に操られるぎこちなさとか、そういうものをもっと表現できるのではないかな、又台本は各役とも個性的に描かれていると思われるが、演じ方でもっと魅力的になるのではないだろうか。再演を楽しみに待っています。

京浜協同劇団 大谷敏之



神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- H&Bシアター●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
- 劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●劇団麦の会●劇団やぶさか●劇団横綱チュチュ●劇団よこはま壱座●風雲かぼちゃの馬車
- まりこ☆みゆーじあむ●ミュージカルプロジェクト●横須賀市民劇場プロジェクト●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第69号] 発行日:2013年12月31日 発行:神奈川県演劇連盟
編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団やぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)